

2024 年度ティーチングポートフォリオ (文学部)

<目 次>

1. 安 藤 弥	p 1
2. 飯 田 直 樹	p 2
3. 市 野 智 行	p 3
4. 古 川 桂	p 5
5. 園 田 博 文	p 7
6. 鶴 見 晃	p 9
7. 手 嶋 大 侑	p 12
8. 福 田 琢	p 14
9. 三 浦 純 子	p 16
10. 三 川 智 央	p 18
11. 箕 浦 尚 美	p 21
12. 山 崎 健 太	p 23
13. 山 脇 雅 夫	p 26
14. 渡 邊 幸 彦	p 28

1、教育の理念

本学は浄土真宗・仏教の精神に基づく大学であり、建学の理念である「同朋和敬」を教育理念とする。お互いを「師弟」ではなく、ともに学び合う学友とし、異なるお互いを敬い、真に和していく関係を「同朋」と呼び、大切にす。また、私達は歴史的存在である。歴史は過去では無く、積み重なって現在を成り立たせているものである。未来に向かい、よりよく歩むために、健やかな歴史的視座を豊かに養う教育を重視している。

2、担当科目の概要

- 【前期】教化学演習 B〔別科〕・日本史特講・基礎演習 I・仏教文化演習 I III・
人文学演習 I III・真宗史〔別科〕・真宗史 I・仏教人間学研究 I〔大学院〕
- 【後期】教化学演習 B〔別科〕・仏教史（日本）・仏教文化演習 II IV・
宗教と人間（親鸞と現代）A・人文学演習 II IV・真宗史〔別科〕
仏教文化講読演習・名古屋・中村学（歴史文化）

3、教育の方法

- ・根本的には、「勉強」ではなく「学問・研究」に取り組むこと、仏教「を」学ぶのではなく、仏教「に」（自らを）学ぶことを基礎としている。
- ・その上で、基礎知識の習得のために講義形式を実施し、実践経験の蓄積のために演習形式を実施する。フィールドワークも重視して実践している。
- ・健やかに生きる力としての仏教、問題の本質を見極める力としての歴史的視座を身につけてもらうため、自らの人生と社会的な現場を常に実感する学びの場を形成する。

4、学生からの評価と授業改善への努力

- ・授業評価アンケートの数値はほぼ平均値以上を確保している。今年度は「とても熱意が伝わってくる。聞いていて面白い。」「宗教を、あくまで同朋和敬の観点から話していて、初めて聞くことなのにすんなり受け入れることができた。授業の目的が明確で、理解しやすかった。」「声も聞こえやすく、分かりやすかった。」というコメントがもられた。
- ・今年度は改善点として特に指摘は無かったが、配付資料の工夫は常に課題である。

5、今後の教育目標

- ・常に高度な専門性を磨きつつ、内容の精練に心がけ、それを適切な表現・感覚で学生に還元し、ともに成長していくことを心がけていきたい。

1. 教育の理念

本学の建学の理念である「同朋和敬」、言い換えれば「共なるいのちを生きる」を、私が専門とする歴史学を通して実践する。歴史学の本質は、過去に生きた人々の営為を「理解」することにある(マルク・ブロック)。建学の理念に即して言えば、「共なるいのちを生きる」過去の人々を尊重し、理解することとなる。具体的には、過去に生きた人々が残した史料の一言一句にこだわり、ていねいに読解していくことを重視し、学生にもそれを求めていく。

2. 担当授業の概要

【専門科目】基礎演習Ⅱ、基礎演習Ⅳ、人文学演習Ⅰ、人文学演習Ⅱ、人文学演習Ⅲ、人文学演習Ⅳ、人文学講読演習Ⅰ、人文学講読演習Ⅱ、日本史概説、日本文化史(思想史)、地域文化論、日本史特講3、現代教養概論Ⅱ(オムニバス形式)、スポーツ文化史(分担)、名古屋・中村学講義Ⅱ(現代社会)(分担)、卒業論文、論文指導

【学芸員課程科目】博物館概論、博物館実習Ⅰ(分担)、博物館実習Ⅱ(分担)

3. 教育の方法

教育方法を実践する前提として、「お互いの違いを認め合い、敬い、尊重し合える学友との出遇いを大切にす」という同朋和敬の精神が重要と考える。教員が学生を信頼するとともに、学生同士もお互いを尊重し、それぞれの良さを引き出していくことができる環境を作っていく。そのために、授業では可能な限りグループワークの時間を設ける。受講生を四、五人程度のグループに分け、共通の課題について議論させ、そのまとめを発表させる。その内容をめぐって全体で討論し、その議論を最終的に発表の優れた点に収斂させていく。コメントシートも積極的に活用する。自由記述式にはせず、授業のポイントを記入させ、優れたコメントは次回で発表し、全員に共有する。

4. 学生からの評価と授業改善への努力

2024 年度に行った授業のうち、学生アンケートを実施した授業の評価は、いずれも満足度の数値が全学平均を上回っていた。ただし、前期の授業のうち、大人数授業(日本文化史(思想史))では、学生とのコミュニケーションや授業の雰囲気づくりの項目の評価点が全学平均を下回っていた。後期では、グループワークの時間を増やす、学生との対話や学生への質問の機会を増やすなどの工夫をした結果、「声が聞きやすくて、しっかり生徒に教えようとしていることが伝わってきました」「先生の説明もわかりやすく、受けていて楽しかった」(日本史概説)との回答や、「楽しかったです」「たのしい」(地域文化論)という感想を得ることができた。ただし、こうした回答を得た後期の授業はいずれも少人数授業(30 人以下)のものであり、大人数授業については、コミュニケーションの活用などに工夫が必要であると考えている。

5. 今後の教育目標

かつて知識人や学生が担ったセツルメント運動の目標の一つは、「社会の大学化」であったと言われている。より良い社会構築に向けて、あらためてこの目標が想起されるべきである。そのために、まずはゼミの充実が求められる。学生一人ひとりがゼミの時間を有意義なものと思い、そこでの経験を踏まえて、卒業後は同様の取り組みを自ら組織化していく力を身につけられるよう、努力したい。

2024年度 ティーチングポートフォリオ

文学部 仏教学科 准教授 市野智行

1 教育の理念

本学の建学の理念である「同朋和教」に基づき、学部学科を越えて、更には教職員も含め「共に生き、共に学ぶ」ことのできる教育指導体制の構築が重要である。その体制を担う一人として、教育、研究に取り組んでいきたい。なぜ、同朋大学で仏教を、文学を、社会福祉を学ぶのか。大学生活の基本的な立脚地として、一人ひとりが「なぜ学ぶのか」ということに向き合えるような場所を少しでも多く提供していきたい。また、本学の特徴の一つである少人数教育という観点から、一方通行の学びでなく、一人ひとりと向き合い対話のできる学びの空間を作っていきたい。

2 担当授業の概要

・基礎演習Ⅱ ・基礎演習Ⅲ ・基礎演習Ⅳ ・教化学特講Ⅰ ・教化学特講Ⅱ
・七祖教義Ⅱ ・浄土三部経講読演習Ⅱ ・現代教養概論Ⅰ ・親鸞と現代 B (社会福祉)
・親鸞と現代 F (編入・再履) ・釈尊と現代 C (社会福祉) ・教化学講義 (別科)
・真宗学演習 B (別科) ・教化学実習Ⅰ (大谷派教師課程) ・教化学実習Ⅱ (大谷派教師課程) ・教化学実習 (別科) ・仏教学 (音大) 73名

3 教育の方法

仏教学科の半数は寺院出身者(別科はほぼ全員)で、将来僧侶あるいは住職なることを志している。具体的には大谷派教師資格の取得を目指すことになるが、その授業内容は大きく講義、講読、演習、実習に大別できる。講義科目は、仏教学、真宗学の基本的な知識習得のため、学びの土台となる基礎的な学びを主要とする。講読科目は、文献を読むことと、文献へのアプローチを学ぶため、発表と講義を交互に行い理解を深める。演習科目は、発表資料の作成から論文指導まで、主体的な学びを基軸に置く。講義・講読・演習を通して、自分で課題を見つけ論文として理論を構築しながら文章を書いていく力を養いたい。

その他、実習科目は、より実践的な法話実習や法語作成など、卒業後をイメージした学びを展開している。加えて、臨床仏教、グリーンケアの学びも今年度の課題点を抽出し、より充実したものとしていく。

4 学生からの評価と授業改善への努力

2024年度の評価を踏まえ、次年度への見通しについて記したい。まず実際のアンケートに記されていた学生の声を列挙すると次の通りである。

【良かった点】

- ・授業の進行速度が良かった
- ・授業資料に穴埋めなどあり、集中して取り組むことが出来た
- ・授業の冒頭に前回の質問に対する応答があったのが良かった
- ・仏教に触れる時間が日常生活の中では、ほとんどないので、大学で基礎的なことが学べて良かった。

【改善すべき点】

- ・テストの難易度が高かった

【良かった点】については継続していき【改善すべき点】については、自分自身の改善点も含めて、以下のように取り組んでいきたい。

- ・授業により取り組みやすくし、授業内で受講生がテスト対策ができるようにしていく。
- ・スクリーンを使用した授業は、より工夫を凝らし分かりやすさを追求していく。
- ・演習授業は資料作成方法など、授業導入により注力したい。文献を読み、理解し、他者を意識しながら資料を作成することは、卒業論文に向けても大切な準備の一つとなる。加えて、文献に対する引用マナーなども具体例を出し、丁寧に指導する必要がある。

5 今後の教育目標

講義、講読、演習、実習の四領域を意識し、机上のみの学びにならないよう、学生が主体的に学ぶことができるような方法を取り入れていきたい。学年に応じた段階的な学びがあることを意識し、各学年で学びの目標をたてながら授業を実施していき。その集大成となる卒業論文の作成については、テーマ設定から論文の書き方に至るまで、よりきめ細やかな指導が必要であると考えている。

1、教育の理念

本学の見学の理念である「同朋和敬」の精神に基づき、文学部人文学科は人間そのもののあり方を考えるための普遍的な真理を探究することを教育目標としている。私が担当する歴史学（西洋史）は異なる時空間に存在した他者に眼差しを向け、彼らを認識し理解することの試みでもある。この積み重ねは、人間とはなにかという真理の探究であるとともに、他者の生み出したもの＝異文化を理解する思考力を育むことでもある。西洋史を学ぶ中で、異文化への認識や理解を深め、混迷する現代を共に生きるための力を育みたいと考えている。そのためにも他者への眼差し以上に、自己を見つめ、自らの視点や思考を認識することができるよう努めたい。

2、担当授業の概要

【専門科目】

欧州文化史 スポーツ文化史 基礎演習Ⅰ・Ⅳ 人文学講読演習Ⅰ・Ⅱ 歴史文化概論Ⅰ 現代教養概論Ⅰ 文化交流史 文化総合 人文学演習Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ
卒業論文 卒業論文指導

【共通教養科目】

外国史（西洋）

【学芸員課程科目】

博物館情報論 博物館教育論 博物館実習Ⅰ 博物館実習Ⅱ

3、教育の方法

西洋史の知識が少ない学生に対し、まずは関心を持ってもらうことが必要と考えている。そのため身近なものや知名度の高い人物や事項から西洋の歴史を学んでもらえるように心がけている。文化交流史の授業では、本年度初めてフィールドワークで工場見学を実施した。講義科目では授業の終わりにコメントペーパーに考察したことや質問を記入させている。次の授業の冒頭で紹介したり、質問に回答したりすることで、他者の意見や視点を学び、理解を深めてもらえるよう努めた。

学芸員課程の担当する講義全てにおいて、前半の講義で学んだ内容が実際どのように実現されているかを自らの目で確かめるため、博物館を訪問して各分野について分析・考察し、パワーポイントを用いたプレゼンテーションを行う。これにより博物館の資料を鑑賞する立場から博物館を作り、運営していく立場の視点を養うことを促している。これらの授業を通して、さまざまな視点から博物館の活動を自ら体験し、分析するとともに、パワーポイン

トを用いた発表やディスカッションを繰り返すことで、プレゼン力、意見交換をするコミュニケーション力も養われる。

4、学生からの評価と授業改善への努力

2024年度に行われた授業評価アンケートでは、概ね平均値を上回った。「身近なものから歴史が学べ、関心を持った」「わかりやすい」、「フィールドワークで理解が深まった」「やりがいがあった」などのコメントがある一方で、「試験が難しい」と言った声も寄せられた。試験についてはテキスト、自筆ノート持ち込み可としているため、資料プリントなどを事前に配布して、事前学習を促していくことでより授業内での理解を深められるよう進めていきたい。

評価が他の項目よりも低かったものは、大人数講義におけるコミュニケーションの取り方であったコメントペーパーに加え、授業内に学生に質問を行ったが、指名しても積極的に参加してもらえないことが多く、特定の学生が答える場面が多くなってしまい、反省するところである。

テキストを用いた授業においては、事前学習としてテキストの該当部分を読み、疑問点などを調べてくるよう指示しているが、ほとんど行われておらず、授業内容を理解できない学生も多い。次年度は事前にテキストを読んで課題をさせるなどの工夫をしたい。

5、今後の教育目標

他者を理解するためにはまず自分を認識することが必要である。そのためにはまず自分が持つ視点に気づき、自己を客観的に捉えられるような機会を歴史学の授業に取り入れたいと考えている。自らを客観的にみることは、学問において客観的に捉えることの大切さを学ぶ機会にもなる。

2024年度ティーチングポートフォリオ

文学部 教授 園田 博文

1、教育の理念

「同朋和敬」の精神を建学の理念としており、「共に学ぶ」「共に育つ」教育を実践していく。園田の担当する授業は、国語学関連の科目である。国語学の授業を通して、文化への貢献、広く豊かな教養の獲得、真理の探究を目指している。さらに、母語としての日本語、第二言語（外国語）としての日本語、自文化としての日本文化、異文化としての日本文化に気づけるように配慮している。

2、担当授業の概要

国語学概論Ⅰ 60名（大人数授業）
国語学概論Ⅱ 59名（大人数授業）
国語法 55名（大人数授業）
国語史 25名
日本語文体論 47名
人文学講読演習Ⅰ 4－1 26名
人文学講読演習Ⅱ 4－1 25名
人文学講読演習Ⅰ 1 4－3 26名
基礎演習Ⅲ A 23名
基礎演習Ⅳ B 8名
人文学演習Ⅰ D 7名
人文学演習Ⅱ D 7名
人文学演習Ⅲ D 9名
人文学演習Ⅳ D 9名
現代教養概論Ⅱ 78名（オムニバス2回）
典籍文化研究（院） 1名
卒業論文 9名
論文指導 9名

3、教育の方法

基礎演習Ⅳおよび人文学演習Ⅰ～Ⅳは、所謂ゼミである。1コマ90分の授業で2～3名の学生が発表し、発表に当たっていない学生は、質問や意見、感想を述べ、全員でディスカッションを行った。ゼミでは主体的な学びを重視しているため、発表する内容は、基本的に学生が自分で決める。決める際には適宜助言を行っている。ゼミで何回か発表し、教員や他の学生の意見も参考にしながら、論文指導を受け、卒業論文を仕上げていく。基礎演習Ⅲは、その前の段階の授業である。

国語学概論Ⅰ・Ⅱ、国語法、国語史は、基本的には講義形式の授業である。履修学生は、25名～60名というように割合多くなっている。人数は多いのであるが、なるべく双方向の授業になるよう心がけている。1回の授業で全員に別々の練習問題を与え、口頭で解答するような取り組みも行っている。授業終了後には、リアクションペーパーを配布し、授業での気づきについて記入してもらっている。これにより、一人一人の理解度や関心の度合いを把握するようにしている。

4、学生からの評価と授業改善への努力

2024年度前期・後期とも授業評価アンケートを実施し、その結果を見て、よい点はさらによくし、改善すべき点は改善する方向で授業に反映させた。これについては、教員からのフィードバックとして報告をまとめ、事務にも提出した。

5、今後の教育目標

卒業論文については、構成がしっかりと示せるように指導する。研究の背景、目的、方法、結論、意義についても4月の時点から意識できるようにする。パソコンを用いて、コーパスを使ったりパワーポイントで資料を作成したりできるように努める。

その他の講義・演習の指導については、学生の主体性を重視しつつ、双方向の授業となるように心がけたい。学生が質問や発言をしやすい環境を作り、ディスカッションを行う。授業終了後にはリアクションペーパーで学生の気づきを確認し、次回の授業にフィードバックさせていく。

一方的に講義し、知識を授けるというような教育ではなく、「共に学ぶ」「共に育つ」という教育理念を重視した双方向性の高い教育にする。

1、教育の理念

私の教育理念は、学びを通して社会や人々のありようをより深く想像的に捉え、自らの主体的な態度を創造的に決定していく力を養うことにある。そのために以下のような点に留意しつつ、教育に携わっている。

①テキストの丁寧な読解

私の専門は、広くは仏教学、中でも浄土真宗の宗祖親鸞の思想に関する真宗学であり、仏教文献を対象とする。そのため仏教の概念・用語、また漢文・古文に習熟することが必要である。テキストに慣れる基礎的な学びを重視しつつ、仏教の概念・用語を適切に理解し、用いることができるようになることが、テキスト読解にまず必要である。この点を重視し、真宗学の基礎を学ぶ講義・演習を大切にしている。

②真宗を学として学ぶ

まなぶ（学・習）はまねぶ（真似）と同根の言葉であるとされるが、学としての真宗学は、親鸞の学び方に学ぶことであると先学（金子大榮『真宗学序説』、文栄堂、1966年）は指摘している。そこで真宗学とは、親鸞が仏教（経典・論疏）に学んだ学び方を明らかにし、仏の教えを歩む道を自ら選び取っていく主体的な学問であると理解している。

私は、大谷大学文学研究科真宗学専攻博士後期課程を満期退学後、真宗大谷派（東本願寺）教学研究所に勤め、主として親鸞教学の研究および真宗大谷派の教学・教化施策、僧侶養成に従事してきた。同朋大学文学部仏教学科専任教員となって以後は、それらの経験を踏まえ、これから仏教学・真宗学を学ぶ学生に対して、テキスト（聖典）を読解し、歴史を学ぶことが、仏教・真宗の人間観・社会観を学ぶことであるとともに、それは現在の人と社会のありようを考える視点であることを伝えている。

そこで特に重視しているのは、人権・差別の問題である。仏教思想、親鸞思想において平等は重要な教えであるが、この平等の教えを確かめ、人びとと共に平等を志向する主体を獲得するためには、我々自身に潜む差別性、現代社会における人権の問題への気づきが不可欠である。学生がそれぞれの経験を通して、また自らの経験を超えて社会や人々のありように目を向けることができるよう、講義・演習共にテキスト読解とともに実践的な学びも重視している

2、担当授業の概要

2024年度担当科目

教行信証講読演習Ⅰ 12名

教行信証講読演習Ⅱ 9名

真宗学演習Ⅰ	6名
真宗学演習Ⅱ	6名
真宗学演習Ⅲ	5名
真宗学演習Ⅳ	5名
真宗学概論Ⅰ	10名
真宗学概論Ⅱ	10名
真宗史Ⅱ	6名
宗教と人間（親鸞と現代）C	53名
宗教と人間（親鸞と現代）D	66名
教化学演習A（別科）	11名
真宗学講読Ⅲ（別科）	21名

3、教育の方法

現在は学部生対象の仏教テキストに関する講読演習科目（「教行信証講読演習」、「真宗学講読」、「真宗学演習」）、および真宗学及び親鸞思想の概論科目（「真宗学概論」、「教化学演習」、真宗史Ⅱ（大学院対象「真宗文化特論」と同時開講）、「宗教と人間〈親鸞と現代〉」）を担当している。またオムニバス形式の科目として基礎演習Ⅱ（5回）、教化学特講Ⅱ（1回）、現代教養概論Ⅱ（2回）、仏教人間学研究Ⅰ（大学院、5回）を担当している。

講読演習では、親鸞思想を学ぶ必須テキストである『教行信証』（「教行信証講読演習」）および『歎異抄』（「真宗学演習」）の読解を演習形式で行い、仏教概念・用語および漢文・古文に対する習熟、親鸞思想の基礎的な理解を目指している。概論では、真宗学概論は、真宗学を構成する主要なテキスト、歴史を概観し、真宗学を専攻するにあたって入門となる授業となることを目指している。同時開講の真宗史Ⅱ・真宗文化特論は、視聴覚教材（動画・絵画史料）を用いて、親鸞の伝記を真宗文化として捉え、真宗史料を多角的に考察できるようにする授業を目指している。社会福祉学部の学生対象の「宗教と人間（親鸞と現代）」は、宗教と接点の薄い現代の若者が、真宗に少しでも触れ、自らや社会のありようを振り返る視点となるよう、親鸞の生涯と思想を視聴覚教材（動画）も用いつつ、授業を行っている。1年で真宗大谷派教師資格取得を目指す別科対象の「真宗学講読」は『教行信証』を概括的に学ぶ講義形式の授業であり、「教化学演習」は伝記『宗祖親鸞聖人』（東本願寺）をテキストに、親鸞の生涯および親鸞が大切にされた法語（仏典の言葉）を通して、親鸞思想を伝える教化を視野に演習形式の授業を行い、資格取得後、僧侶として従事することを意識した授業を目指している。

講義形式の授業では、主に資料及び板書を用いつつ、パワーポイントやDVDを用いた視聴覚教材（写真資料、漫画・アニメ）を用いている。親鸞が生きたのは平安末から鎌倉時

代であり、親鸞思想の背景となる歴史、社会状況共に現代人には容易に把握しがたい側面がある。ここに古典を理解する一つの障害があり、時代と社会を異とする歴史資料としての側面に注意を向けつつ、現代から過去、過去から現代を思考する往還的な視点の中で、テキスト及び思想を捉えるよう、工夫している。

また受講後復習ができるよう、記入式の学習資料を作成し、理解向上に努めている。

たとえば文献研究は、活字資料を主なテキストとなるが、親鸞には多くの自筆著作が遺されており、こうした原本（複製・写真）に触れることも親鸞思想を考えるに際して重要なことである。『教行信証』及び『歎異抄』を用いた文献研究科目も含め、親鸞という人に触れることができる資料を用いる他、歴史背景や社会状況を視覚的に捉えることができるよう、漫画・アニメを用いる。

また、教育は、教員の意見・考えを押しつけるものであってはならず、学生自身が学び、新たな発見をしていくことが重要である。学生の意見・考えは、学生自身が新たな知見にいたるための重要な手掛かりであると考え、学生の意見・考えを尊重し、対話的に授業ができるよう努めている。そのため授業時、あるいは授業以外でも質問・相談ができるよう、少人数教育である点を活かして関係を構築するよう努めている。

4、学生からの評価と授業改善への努力

授業評価アンケートが行われた科目は以下の科目である。

宗教と人間（親鸞と現代）、真宗学講読

受講生の評価は概ね評価をいただいているが、講義科目での学生とのコミュニケーション、双方向のやり取りをより工夫している必要があると考えている。

24年度は、受講生の習熟度の違いに応じて、それぞれが積極的に受講できるようにすることを念頭において、授業を行ってきた。しかし十分に実行できたとは言い難い。次年度も引き続きこれを課題として取り組んでいくこととしたい。

5 今後の教育目標

前記教育理念に基づきつつ、同朋大学が重視する少人数教育を活かして、全人的な教育を心がけ、学生の生きる力を養う教育を目標としている。

文学部仏教学科は、真宗大谷派僧侶となるべく、真宗大谷派教師資格取得を目指す学生の他、仏教に興味を持って入学する学生、あるいはまったく仏教に縁のないところから入学してくる学生もいる。関心も目標も異なる学生が共に仏教を学び合う環境作りが課題である。そのためにも学生の声を聞くことが必要であり、対話しながら学ぶ環境を目標として取り組んでいきたいと考えている。

2024 年度ティーチングポートフォリオ

文学部人文学科 手嶋大侑

1、教育の理念

同朋大学文学部人文学科の教育理念は、建学の理念（同朋和敬）に基づいて個性の存在価値を大切に、混迷する今という時代を生きるための「教養力」「思考力」を育むことである。

以上の教育理念のもと、手嶋は「日本史」分野の主に古代を担当し、学生の基礎的学力の向上および「教養力」「思考力」「批判的読解力」を養う授業を実施してきた。具体的には、講義系の授業を通して、基本的な知識の教授を、演習系の授業を通して、情報収集力・読解力・論理的思考力を養う授業を実践してきた。

2、担当授業

- ・基礎演習Ⅲ
- ・基礎演習Ⅳ
- ・人文学演習Ⅰ
- ・人文学演習Ⅱ
- ・人文学演習Ⅲ
- ・人文学演習Ⅳ
- ・卒業論文
- ・卒業論文指導
- ・歴史文化概論Ⅱ
- ・人文学講読演習Ⅰ 13－3
- ・人文学講読演習Ⅱ 13－3
- ・古文書基礎学Ⅱ
- ・日本文化史（古代・中世）
- ・日本史 A
- ・日本史 B
- ・日本史特講 1
- ・現代教養概論Ⅱ〔オムニバス〕
- ・名古屋・中村学（現代社会）〔集中講義〕

3、教育の方法

基礎的学力・「教養力」を養う授業としては、日本文化史（古代・中世）、日本史 A・B、日本史特講 1、古文書基礎学 2 が該当する。これらは、最新の学術研究の成果を盛り込むため、毎年改訂を施した自作の授業資料（レジュメ、パワポ）を用いた講義を主軸に進めてお

り、そこでは、単なる知識の詰め込みに終始しないよう、授業内容を考えている。例えば、ある歴史的出来事に関する複数人の研究者の解釈・理解を示すことによって、時代による解釈の変化、視点の転換の大切さ、多様な解釈が並立する（正解は一つとは限らない）ことなどを意識的に教えるようにしている。

「思考力」を養う授業としては、人文学講読演習、人文学演習、卒業論文などが該当する。人文学講読演習では、日本古代史関係の史料を輪読する授業を実施している。そこでは、学生たちに担当条文について調べてもらい、レジュメを作成させ、レジュメに基づいて発表してもらっている。この作業を通して、必要な情報を収集・整理し、レジュメにまとめ、それを他人に伝えて議論する力を習得させるようにしている。また人文学演習、卒業論文では、学生の発表軸の授業を実施している。そこでは、歴史学的な考え方（論理的思考）・史料読解・史料操作などを指導しつつ、先行研究の読解、論点の整理、テーマ（問題）設定、テーマに対する自身の見解を導き出すための調査・分析を学生に実践させており、この作業を通して、学生の歴史学的「批判的読解力」「論理的思考力」を養っている。

また、人文学演習や名古屋・中村学（現代社会）では、本学近隣地域のフィールドワークを実践するなど、座学ではない学びの方法も経験させている。

4、学生からの評価と授業改善への努力

2024年度に実施された授業評価アンケートでは、総合的に平均以上であった。

ただし、講義系の授業において、学生が発言しやすい雰囲気が作れているかどうかの点が比較的低かったのは改善点だと考える。これについては、講義系授業で学生とコミュニケーションをとる時間が少なかったことが一つの要因と感じるので、来年度はコミュニケーションの時間を積極的に作り、良い雰囲気づくりを心掛けていきたい。

5、今後の教育目標

学生に、“力が身に付いた”と実感してもらえるような授業を目標としたい。この点を達成するためには、文系学問に対する認識を根本的に変えていく必要がある。人文学科の学びを通して身に付く能力がいかにか社会に出てから役に立つものなのかを、学生に繰り返し伝えていく努力を継続していきたい。

1 教育の理念

建学の精神を抛りどころとし、共に問う姿勢を基本におき、仏教を基礎から学び、さらに語学・政治文化・哲学的理解のうえに成りたつ思想史研究・文献学とはどのようなものを伝えたい。アジア諸地域に伝播し、各地の伝統文化や宗教と交流し、独自の展開を遂げた仏教文化を学ぶことで、次世代の若者に異文化共生の国際感覚を身につけてもらえるよう務める。

2 担当授業の概要

2024 年度担当科目

- 3210 宗教と人間（釈尊と現代）A 48 名
- 4290 仏教学研究（大学院）2 名
- 4680 仏教人間学研究Ⅰ（大学院）11 名（5 回）
- 5270 仏教学講義（別科） 21 名
- 5305 仏教学概論Ⅰ 9 名
- 5306 仏教学概論Ⅱ 9 名
- 教化学実習Ⅰ（大谷派教師課程）
- 教化学実習Ⅱ（大谷派教師課程）
- 教化学実習（別科） 21 名

3 教育の方法

経験的に、講義においても講読・演習においても適切なテキストを定めることが重要と考えている。学生はテキストの目次によって授業の全体像を把握できる。本来ならばシラバスによって授業の全体像を把握してほしいところだが、シラバスにしっかり目を通す学生は少ない。テキストを持参させ、繰り返しその目次の中で毎回の授業がどこに位置するかを伝えるよう心がけている。現在、自作テキスト形式の授業は「宗教と人間」について行っている。本年度は「仏教学概論」についても自作テキストを用意したいと思ったが、時間的余裕がなかったため、毎回自作プリントを配布して進めることとなった。大谷派教師資格科目については東本願寺出版部の指定テキストを使用している。基礎演習は学生が各自に課題図書を選び、読書レポートを提出し、それを個別に添削・指導して、将来的に卒業論文を書くための最初の準備としている。本年度も例年通り、最後に文集を作成した。

4 学生からの評価と授業改善への努力

授業評価アンケートは例年と較べて大きな変動はないが、コロナ禍の非常手段であったチャットでのコミュニケーションを利用した対話が、年々減ってきているように思う。代わりに直接対話が増えたかといえばそういうわけでもないので、学生とのコミュニケーション方法について、再考すべき時期がきているようにも思う。大学での研究はあまり安易なものであってはならないが、AI を利用した情報整理は今後必要な技術である。

5 今後の教育目標

学ぶことの楽しさと、大学の学問とは本来、資格を取るためや就職のための努力ではなく、真理を探究したいという衝動を解放する喜びであることを、若い世代に少しでも理解してもらえるよう今後も務めたい。

2024年度 ティーチングポートフォリオ

三浦 純子

1 教育理念

同朋大学は、「同朋和敬」の精神を教育の根幹として、今という時代を生きる「教養力」「思考力」を育むことを教育目的を掲げている。また、人文学科のディプロマポリシーにある、「多文化・異文化の共生する社会を理解し、人文学的教養として人類の営為に関する幅広い知識を身につけている」とあるが、文学部人文学科が目指す教育の中に、多様なものの見方・考え方を学び「教養力」を磨くという目標が掲げられている。こうした、教育理念をもとに、私は多文化・異文化が共存する社会を理解し、教養を身につける、という点に着眼し、学生に国際的視点を持ってもらうこと、英語力をはじめとする語学力を身につけること、異文化に触れるという機会に巡り会えるよう教育活動を行った。

2 2024年度 担当授業の概要

英語 1L

英語 2L

英語 1M

英語 2M

人文学講読演習 I

人文学講読演習 II

英米文化

現代世界情勢

人文学演習 I, II, III, IV

基礎演習 IIC

現代教養概論

海外語学研修（2025年度秋の実施に向けた準備・研修先イギリス）

3 教育の方法

2024年度は、語学の授業、講義授業、演習科目と3種類の授業を担当した。英語科目では、語学の基礎力を高めるとともにそのモチベーションの基礎となる「語学への興味」「異文化への興味」を深めるための工夫を行った。英語を学ぶことで、日本語だけでは得られない情報を知ることができることを教科書を通じて伝え、単元毎の単語テスト、またリスニングもゲーム形式で苦手意識を乗り越えて楽しく学んでもらう方法を取り、回を重ねるごとに学生の顔の表情が変わり、自信を持ち学習

意欲を高めてくれた学生が多数見られた。

講義科目では、英米文化と現代世界情勢を担当した。英米文化では、英語学習するための基礎知識としてイギリスとアメリカの生活習慣、文化、社会問題等を取り上げた。担当者自身のイギリス生活での経験や写真を交えた内容で、毎回の気づきをコメントシートに記録、学生の海外への興味関心を高めてもらう授業の方法を実施した。現代世界情勢は、世界で起きている様々な諸問題について、遠くのこととしてではなく自分ごととして「関心」を持ってもらうことを一番の目標に掲げ、授業を実施。情報を入れるインプットの時間と、コメントシートやリアクションの時間を授業中に必ず設け、「思考すること」を大切にした。受講人数が30名を超えていたため、毎回のディスカッションは難しかったが、最後の授業にはワークショップを行い、関心を持つ、情報を得る、思考する授業を実施した。演習科目でも、読解した情報を言語化し、議論を重ねていくことで、知識として定着を図り、教養と思考力を高める授業内容を実施した。演習科目でもアクティブラーニングとしてワークショップ形式の授業を取り入れ、またゼミでは文化人類学のフィールドワークの実践として、名古屋モスクを訪問、報告書をポスター形式にまとめ、学習の振り返りを行った。上記の通り、思考力と教養力を高める目的で、授業を実施してきた。

4 学生からの評価と授業改善への努力

授業を通じて、英語科目は使用教科書が難しかったこと、また英語への苦手意識が強い学生と授業を通じて英語力が伸びていった学生と乖離が生じたことが懸念される。これを受け、次年度は再履修クラスに関しては、教科書の内容の難易度を改めて選定し、スピードももう少し落とすことを心がけたい。講義科目等に関しては、授業を通じて「自分が人生でこの先も触れることのなかったと思われることに触れた」「他者を否定しない議論の方法を取るこの授業を通じて、相手を肯定した上での対話が大切であり、自分もこれからは他者を肯定して受容したい。こうして、世の中が少しずつ変わるのかもしれない」等の気づきの声が寄せられた。今後も、授業を通じて、学生の卒業後の人生を見据えた教養力と思考力を身につけてもらうための努力を重ねていきたい。

5 今後の教育目標

ある学生に講義最終日に「名前を覚えてもらえたことが本当に嬉しかったです」と言われた。ささやかな言葉だが、自分が肯定されること、見守ってもらえることを学生が求めていることを感じた。授業を通じて、様々な情報を伝え、共に学びを深めていくことで教師自身も学生から学びを得て成長する、同志のような存在として、今後も教員としての役割に従事していきたいと考えます。

1、教育の理念

本学文学部人文学科では、人間そのものの在り方を考えるための普遍的な真理を探究するとともに、現代を生きるための「教養力」「思考力」を育むことを、学科全体の教育目標として掲げている。私は人文学科の中でも、日本文学専攻の教員として、主に近現代文学に関する授業を担当しており、文学をとおしてさまざまな時代や社会の中での人間そのものを見つめるとともに、テキストの読解に必要な知識や思考力、また、テキストを時代や社会といった文化的背景と関連づけて考えることのできる広い視野を養うことを目指している。文学は虚構ではあるが、そこに描き出されているのは、まさに人間の真理である。文学を探究することによって、現代を生きる力を育んでいきたいと考えている。

2、担当授業の概要（科目名および受講者数）

- ・日本文学概論Ⅱ 49名
- ・日本文学史（近現代） 25名
- ・日本文学（近現代） 29名
- ・人文学講読演習Ⅰ2-2 20名
- ・人文学講読演習Ⅱ2-2 20名
- ・人文学講読演習Ⅰ7-1 29名
- ・基礎演習ⅠC 22名
- ・基礎演習ⅣM 8名
- ・人文学演習ⅠB 8名
- ・人文学演習ⅡB 9名
- ・人文学演習ⅢB 11名
- ・人文学演習ⅣB 11名
- ・現代教養概論Ⅰ（オムニバス形式、2回分を担当） 73名
- ・論文指導 11名
- ・卒業論文 11名
- ・国語科教育法Ⅰ（教職科目） 7名
- ・国語科教育法Ⅱ（教職科目） 5名
- ・国語科教育法Ⅲ（教職科目） 4名
- ・国語科教育法Ⅳ（教職科目） 4名

3、教育の方法

まず、「基礎演習」「人文学演習」「人文学講読演習」といった演習形式の授業においては、原則として、授業ごとに設定されたテーマについて、学生自身が分担して事前に調査や研究を行い、その発表をもとにしたディスカッション形式で授業を進めている。学生が主体的に課題に取り組むことで、文学テキストそのものを理解する力を養うとともに、情報収集や分析の方法を実践的に身につけることができると考えるからである。また、学生同士のディスカッションをとおして、各自が、自分の意見を言葉としての確に表現すること、あるいは逆に、他者の意見をしっかりと理解することの重要性に気づき、互いの視野を広げ、テーマに対する考えを深めていくことが可能となる。最終的には、そのテーマに対する自らの考えをレポートとしてまとめることで、卒業論文に向けた論文作成の方法も徐々に身につけていく。

次に、「日本文学概論」「日本文学史」「日本文学」「現代教養概論」といった講義形式の授業においては、第一に、わかりやすい授業を心がけている。その工夫の一つとして、授業では毎回、自作の資料プリントを配付し、それをういながら授業を進めている。また、授業ごとに学生の理解度は異なるため、授業の最後には毎回、配付したコメント用紙に、学生自身が授業の中で感じた疑問点や興味を持った点などを記入してもらい、次の授業の具体的な展開に役立てている。そして、二つ目に心がけているのは、学生自身に考えさせる授業である。講義形式の授業では、どうしても学生が受け身になってしまうことが多いが、授業の中でこちらから学生に問いかけたり、逆に、学生から意見を言ってもらったりすることで、学生自身が考える時間を作り、できるだけ双方向的な授業展開になるよう配慮している。また、先ほどのコメント用紙に記入された学生からの疑問や意見の中で、ほかの学生の考えを深めるために役立つと思われるものについては、必ず次の授業の冒頭で紹介するようにしている。

最後に、「国語科教育法」であるが、この授業は人文学科の科目ではなく、中学校・高等学校の国語の教員免許取得を目指す学生が、3～4年次に履修する教職課程科目である。3年次には、学習指導要領の理解や学習指導案の作成など、国語科教育の基礎的な学習や実践を行い、4年次には、模擬授業を重ねるとともに、国語科教育をめぐる諸問題についてのディスカッションを行うことによって、国語科教育についての問題意識を深めながら授業や学習指導の上達を図っている。

4、学生からの評価と授業改善への努力

2024年度の「学生による授業評価アンケート」では、前期が「日本文学史（近現代）」「人文学講読演習Ⅰ2-2」、「人文学講読演習Ⅰ7-1」、後期は「日本文学概論Ⅱ」「日本文学（近現代）」「人文学講読演習Ⅱ2-2」の6つの授業について、学生からの評価が行われた。

その結果は、まず講義科目の「日本文学史（近現代）」「日本文学（近現代）」「日本文学概論Ⅱ」については、「人物の資料に載っていない情報などを教えてくれるので楽しみなが

ら受ける事が出来た」「これまであまり文学や歴史に触れてこなかった人間でも、この時代の文学の流れが理解でき、さらに深掘りできるので面白いです」（日本文学史（近現代））、「普段は細かいところまでは理解ができていない文学作品について、著者やその作品の細部まで説明してくれた」（日本文学（近現代））、「文学のテキストとしての読み方が興味深かった」「語りの構造についてとても詳しく説明されていて、初めて聞くことなのに理解しやすかった」「とても興味深く授業を受けることができました。新しい発見もたくさんありました」（日本文学概論Ⅱ）という好意的な評価が多かった。次年度も学生自身が興味関心を持って臨めるようにさらに工夫して授業を行いたい。

また、演習科目である「人文学講読演習Ⅰ2-2」「人文学講読演習Ⅰ7-1」「人文学講読演習Ⅱ2-2」については、「夏目漱石の『こころ』をじっくり読み、考え、作品の面白さや深みを知り、また演習発表では自分の意見を述べ、他の人の考えを知ることができ、新たな発見もあり、多くの学びを得られた授業でした。毎回楽しみにしていた授業でした」（人文学講読演習Ⅰ2-2）、「村上春樹の小説を取り上げ、演習発表で他の人の意見を聞くことで毎回新しい発見があり、大変興味深かった。毎週楽しみにしていた授業の一つでした」（人文学講読演習Ⅰ7-1）、「強いメッセージをもったプロレタリア文学は読み応えがあり、大変興味深い授業でした」「プロレタリア文学とは一体どういうものなのかがよくわかった。この分野について深く研究したくなった」（人文学講読演習Ⅱ2-2）というように、演習をとおして学生の学びの幅を広げることができたように思う。今後も学生の主体的な発表を中心に、学生自身に考えさせる学習を展開したい。

「学生による授業評価アンケート」の対象となった授業以外についても、常に授業内容を振り返りながら、より満足度の高い授業を実現できるよう、改善を行っていくつもりである。

5、今後の教育目標

最終的には、文学をとおして人間や社会の真理を探究するとともに、その探究をとおして、現代を生きる力を学生たちに育んでいくことが教育目標である。その目標をできるだけ実現するためにも、まずは、学生が興味・関心を持つことのできる授業、そして、その興味・関心をもとに、学生自身が課題を見つけ、解決していく力を養えるような授業を心がけるつもりである。

1、教育の理念

同朋大学の建学の精神「同朋和敬」に基づく「共に学ぶ」「共にいきる」教育の実践を目指している。私は主に日本文学（古典）の教育を担当しているが、昨今は古典の有用性を疑問視する声も聞かれる。しかし、「現代において古典は必要か」「学問とは何か」というような疑問に対して思考することは、人文学の根本に繋がる事柄でもある。学科のポリシーに掲げられているように、人文学は、「混迷する今という時代を生きるための「教養力」「思考力」を育む」ものと考えるが、幅広い学びとともに、学生達が何かを探究する喜びを実感できるような教育を行いたい。

2、担当授業の概要

2024年度の担当授業科目の概要を示す。

- ・日本文学概論Ⅰ 古典文学概論
- ・日本文学史（中世） 鎌倉時代・室町時代の日本文学史
- ・日本文学（中世） お伽草子から見る中世文学
- ・仏教文学 仏教説話集を読む
- ・書誌学 書誌学入門
- ・人文情報学 人文情報学入門
- ・人文学講読演習Ⅰ 『宇治拾遺物語』を読む
- ・人文学講読演習Ⅱ 『宇治拾遺物語』を考える
- ・人文学講読演習Ⅲ 『百人一首』を通して古典文学研究の方法を学ぶ
- ・現代教養概論Ⅱ オムニバス 2回分「日本古典文学を考える1 現代社会において古典を学ぶことの意義」「日本古典文学を考える2 物語の伝承に時代の関心を読む」
- ・基礎演習Ⅰ、Ⅱ 初年次教育
- ・基礎演習Ⅳ、人文学演習Ⅰ、Ⅱ、Ⅲ、Ⅳ 古典文学ゼミ
- ・論文指導 卒業論文指導

3、教育の方法

上述の教育理念の達成のため、初年次教育や初回の授業においては特に、「大学での学びとは何か」「古典にはどのような意味があるか」など、学ぶことの意義を問いかけ、学生とともに考え、意識するようにしている。

講義科目における成績評価の方法として、毎回のコメントカード（考察・発見の記録）を期末試験と同程度に重視している。コメントカードの目的は、直接的には内容理解の確認と思考力や表現力の向上のためであるが、毎回のカードによって、学生を個別に理解し

て適切な助言をすることが可能となっている。

アカデミックアドバイザーとしてかかわる基礎演習や人文学演習の学生だけでなく、できるだけ多くの学生を知ってそれぞれに合った対応ができるように努めている。必要な情報は教員間で共有するように心がけている。

古典文学の学びにおいては、実際に、和書を見たり触れたりすることも重視している。今や古典籍もインターネットで精細な電子画像を多く閲覧することができ、それらの活用も欠かせないが、実際に自分で触れて調査するといかに多くの情報を見落とししていたかに気付く。その体験に、原拠に当たることの重要性や面白さ、研究一般に対する基本姿勢を学んでほしいと考えている。

4、学生からの評価と授業改善への努力

2024年度前期「日本文学概論Ⅰ」の授業アンケートでは、「日本文学や物語についての知識や理解が深まった」「とても分かりやすい」などのコメントがある一方で、「進行が早い」とのコメントもあった。古典文学に苦手意識を持つ学生も多いため、各授業時に提出された学生のコメントを確認して速やかに補うように心がけている。

2024年度後期「書誌学」の授業アンケートでは、「古い本の種類の様々な名称や、使われている紙の種類 など、いつも興味深い授業です。」「古書など普段なかなか触れ合わないものから情報を得ていくのが楽しいです」等のコメントを得た。日常で和書に直接触れる機会は少ないため特に体験を重視しているが、学問として専門的に学んでほしいことも多くある。必要な知識を効率よく得られるように授業の進め方を工夫していきたい。

5、今後の教育目標

- ・人文学を通して人としての豊かさを育む
- ・古典文学に苦手意識がある人達に向けた授業方法の開発

1、教育の理念

本学文学部人文学科では、人間そのものの在り方を考えるための普遍的な真理を探究するとともに、現代を生きるための「教養力」「思考力」を育むことを、学科全体の教育目標として掲げている。私は人文学科の中でも、日本文学専攻の教員として、主に古典文学、特に上代中古という古い時代に関する授業を担当している。古典文学を享受することと理解することの間には大きな違いがあるが、理解するために必要なのは自分たちとは異質な人間である古代に対する理解である。一文を理解するために必要な古典文法などの基礎的な要素は当然として、死生観はどうであったのか、男女関係はどのように発想されたのかなど、現代日本人とは決定的に異なる他者である人間が紡いだテキストを、その水準において解像度を上げていくことが求められる。そこで培われるのは、「時代が変わっても同じ日本人」だから理解できる古典文学ではなく、自身とは世界観も常識も何もかも違う他者に接近していく為の態度と作法である。古典文学を学ぶことを通して、共通言語としての「教養力」、他者理解の為の「思考力」を養成する教育を行いたい。

2、担当授業の概要（科目名および受講者数）

- ・日本文学史（上代・中古） 5名
- ・日本文学（上代・中古） 2名
- ・人文学講読演習Ⅰ3-2 5名
- ・文章表現（論述表現） 5名
- ・基礎演習Ⅲ 24名
- ・基礎演習ⅣC 2名
- ・人文学演習ⅠC 1名
- ・人文学演習ⅡC 1名
- ・人文学演習ⅢC 4名
- ・人文学演習ⅣC 4名
- ・現代教養概論Ⅰ（オムニバス形式、2回分を担当） 77名
- ・言語文化論 6名
- ・古文書基礎学 18名
- ・日本語文法 30名
- ・サブカルチャー論 1名

3、教育の方法

まず、初年次科目として専門に分かれる前の「基礎演習」では、学生の学力状況に鑑み、文章読解能力の向上を狙って評論文を数多く読ませている。文章を読解し、その内容を人に伝

達することを授業内で繰り返し演習することで、これまでに読解してきた文章量の絶対的不足や、自身の「感じたこと、おもったこと」しか出力してこなかった学習不足を補うトレーニングを授業内で行わせている。「文章表現」も基本的には同様に位置づけながら、アカデミックな文章を書くのに必要とされる技術だけでなく、文章を書く際に必要な物事の認識、把握の仕方、文章の構成の仕方を教授している。今年度の新入学生の全体的な国語力の低下に鑑み、文章を読む作業も含めて教える必要を強く意識している。

「人文学演習」「人文学講読演習」といった演習形式の授業においては、原則として、授業ごとに設定されたテーマについて、学生自身が分担して事前に調査や研究を行い、その発表をもとにしたディスカッション形式で授業を進めている。基本的には古典文学作品を多く自身の力で読解して考える機会をなるべく多くもてるようにし、その中で卒業論文にもつながっていく問題意識を涵養していくことが目標である。

次に、「日本文学史」「日本文学」「言語文化論」「サブカルチャー論」といった講義形式の授業においては、学生の問題意識の喚起を心がけている。古典文学や、それに関わる論理的思考に触れたことのない学生が説明を受けて内容を知ってそれだけで満足してしまうことの無いよう、内容を理解した先にどういった問題があるのか、そこに気づくことで世界の見え方がどのように変わってしまうのかを伝えることを目的としている。その工夫の一つとして、「日本文学史」「日本文学」の授業では毎回、自作の資料プリントを配付し、それを用いながら授業を進めている。プリント内には読解課題を設定し、説明されて理解したつもりになって満足することのないよう、自身で考え続けながら教室にいることを求めている。また、授業の最後には毎回、配付したコメント用紙で、学生自身が授業の中で学習したことをまとめて提出させている。感じたこと、思ったことではなく、毎回何を学習したか、それによって自身はどういった視点を獲得したか、振り返りを行うことで、漫然と授業に座ってプリント内容を覚えるのではなく、学習するというそのものを学んでいってもらうことを目指している。

「日本語文法」では高校文法を基礎から学び直すことを目標に全15回の授業を組み立てている。日本史専攻、日本文学専攻に進む学生が、資料を自身の力で読解できるようになる基礎力として、語学としての古典文法をしっかりとした形で身につける必要があるということ構造的に把握させ、その上で課題に取り組みさせている。

最後に、「古文書基礎学」であるが、この授業はいろいろな専門で、或いは学芸委員資格に必要な能力である崩し字、特に平仮名を読めるようにするための授業であるので、視覚資料を用い、毎回文字を探す、読む実習を行っている。毎回のハードルを低く設定することで、学習の達成感を高め、一学期間を通して平仮名の習得を目指している。

4、学生からの評価と授業改善への努力

2024年度では、前期が「日本語文法」、後期は「古文書基礎学」の2つの授業が「学生によ

る授業評価アンケート」の対象であった。

「古文書基礎学」では、毎回の課題設定がうまくいったようで、「早く次の字が知りたい」「歌として把握できるようになると見え方が違う」などの声が聞かれた。

「日本語文法」では文法を基礎的な把握から授業内で解説したところ、このような授業が高校でも受けられたら古文が嫌いにならなかった、などの前向きな声が聞かれた。

そのほかの授業でも、常に授業内容を振り返りながら、より満足度の高い授業を実現できるよう、改善を行っていくつもりである。

5、今後の教育目標

最終的には、学生たちが学に触れることによって自身の世界との向き合い方を構築していきけるように知識を教授し、問題意識を涵養していくことが教育目標である。その目標をできるだけ実現するためにも、まずは、学生がより多くの知識を獲得していくことのできる授業、そして、その知識をもとに、学生自身がさらなる学習を重ね、自分自身の問題意識をもって世界と対峙できる力を養えるような授業を心がけるつもりである。

今年度、授業内外で学生と向き合う中で、そもそも授業に出る出ない、学校に来る来ないのレベルでの問題をどのように解決していくかという課題に多く取り組まねばならなかった。最終的には個々の学生の現状を丁寧に把握する以外に取ることのできる手段はないが、そこまで含めて教育という意識を恒常的に持ちながら学生と対峙したい。

2024年度ティーチングポートフォリオ

文学部人文学科 山脇雅夫

1、教育の理念

同朋大学の建学の理念である「同朋和敬」には、阿弥陀仏の絶対平等の救いという教えが根底にある。この救いに救われていくものとして自己を見、他者を見ることは、社会的な身分や民族の差を超越した絶対の相において人間をすることである。そうした境位は、哲学がその根本において希求してきたものと重なっている。人が「よく生きる」ためには、そうしたものを求めていくほかないということが、哲学の父たちの根本的立場であった。わたしが教育において目差すのは、主として西洋の哲学の歴史を築いてきた哲学者たちの仕事に学びながら、そうした哲学の立場を学生諸君に伝えることである。そのことをつうじて、学生諸君がさまざまな日常的偏見から自分を解放し、とらわれのない自由で強靱な思考力＝哲学的思考力を培うことを支援したい。

2、担当授業の概要

- ・哲学 62名（哲学の根本にあるものを西洋哲学の歴史に探る）
- ・哲学史 161名（西洋近代哲学史、特に17世紀を中心に）
 - ・倫理学 60名（功利主義、義務論、コミュニタリアニズム等、現代倫理学説を身近な問題から）
- ・ドイツ語Ⅰ,Ⅱ 28名（ドイツ文法初歩）
- ・人文学演習Ⅰ,Ⅱ,Ⅲ,Ⅳ 17名（現代思想の基礎）
- ・人文学講読演習 42名（倫理的思考法の基礎）
- ・欧州文学概論Ⅰ 46名,Ⅱ 39名（欧州文学のバックボーンとしての聖書文学とギリシア文化）
 - ・欧州文学史 96名（ニヒリズムの文学史。ドストエフスキーをニーチェを中心に）
 - ・基礎演習Ⅱ 23名（初年次教育。大学での学び方）
 - ・基礎演習Ⅳ 8名（現代思想の基礎）

3、教育の方法

- ・各種講義においては、哲学・倫理学等の古典的な問題を現代的課題と結びつけことによって、古典的問題が今なお人間の課題であり、哲学・倫理学の考え方を現代を読み解く有効なツールとなっていることを学生諸君に確認してもらえるよう努めている。あわせて、西洋文化のさまざまな側面に教養を深めてもらうため、ギリシア文化や聖書といった西洋文化の土台、資本主義の精神などを授業テーマとして取り上げている。
- ・ゼミ等においては、哲学的テキストの精読・それについての討論を中心に、読解力、自分の考えを言語化し人に伝える能力、哲学的思考力等の涵養につとめている。また、レポート

等の作成を通じた文章力の育成を目指している。

・どの授業においても、わたしは、教科書や教師から教えられた知識をため込むのではなく、自分の問題関心、自分なりの「？」から出発する思考の経験を重視している。哲学的問題は当たり前だと思っていたことを揺さぶるものであり、そうした力を、学生諸君が自分なりの問題を発見するために活用している。

4、学生からの評価と授業改善への努力

・授業評価アンケートの数値はおおむね平均値以上を確保している。特に改善を要求するものはなかった。とはいえ、とりわけ講読演習において、受講生の人数がバランスを欠くほどに多くなってしまい、講読という教育方法による教育成果を十分に上げることができなかった。この点は、次年度は、英文講読の形に変更し、「読む」という行為に集中した講義を設計することで、改善を図りたい。

5、今後の教育目標

・上滑りに流れていく情報に曝されている現代の若者に、強力な思考や想いに裏打ちされた「ことば」に触れる機会を提供することは、文学部教育の課題である。「すぐ役に立つものは、すぐに役に立たなくなる」（小泉信三）ということ肝に銘じ、学生諸君が本物のことばをみずからの血肉化し、人生を支える力とすることができるよう、サポートをしていきたい。

1、教育の理念

本学文学部人文学科のアドミッションポリシーに、「文学・歴史・思想・文化の各分野におけるアカデミックな教育を基盤に、人間そのもののあり方を考えるための普遍的な真理を探究するとともに、混迷する今という時代を生きるための「教養力」「思考力」を育むこと」を教育目的とするとあるが、私はその方針に基づいて、中国古典文学（史伝、中国哲学を含む）をベースに、中国語、伝統文化、映像文化に至るまで、「日本文学」「歴史文化」「現代教養」の三専攻にまたがって幅広く科目を担当しつつ、学生たちの基礎力や感性を磨くことを目指して教育に取り組んでいる点は毎年変わりが無い。

2、担当授業の概要

2024 年度は以下の科目を担当した。

- ① 全学向け（基礎力養成に関わる）科目としては、
漢文基礎学Ⅰ、Ⅱに加え、中国語Ⅰ、Ⅱを担当した。
- ② 文学部向け教養科目としては
現代教養概論Ⅰ（2 コマ分担当）と文化総合(7 コマ分担当)を担当した
また、2 年ぶりに芸術批評を担当し、映画を芸術として様々な角度から検証する講義を行った。
- ③ 文学部向け専門科目（及び教職科目）としては
中国文学概論Ⅰ、Ⅱ、人文学講読演習Ⅰ、Ⅱ
- ④ 人文学科（ゼミ）専門科目
日本文学専攻と現代教養専攻の二専攻にまたがり
基礎演習Ⅳ、人文学演習Ⅰ、Ⅱ、Ⅲを二系統担当した
4 年生に対しては人文学演習Ⅳとともに卒業論文・論文指導を行った。 以上

3、教育の方法

授業の方法としては、講義系の科目と演習（講読）系の科目とで大きくやり方は異なる。

講義系の科目では、予め用意したプリント資料を学生に配付し、その資料に基づいて逐次説明を加えながら講義するスタイルを基本とするが、学生たちの理解を深めるために多くの映像資料を副次的に用いるようにしている。授業時には折に触れて学生に質問をし、定期的にコメントペーパーを出させるなどして、学生の理解度を確認しながら進めることを心がけている。

演習系の科目のうち中国文学関係の授業においては、主として中国古典（漢文）のテキスト（白文の状態）を配布し、訓点をつけて読解することを学生たちに課している。毎回担当

者を定め、工具書（辞書など）や訳本、解説書等を参考にしてまとめた自分の読み方をレジюмеとして予め提出させた上で、授業時にはそのレジюмеを元にその読み方の可否を受講者全員で検討していくという方法を採用している。標準的な読み方を一方的に教えるというのではなく、学生たちに自分で考えさせ、なぜそういう読み方になるのかを議論させることで、より深い読解力が養成されると考えている。

現代教養専攻の演習では「表象文化」「地域文化」をテーマとしており、授業においては表演芸術（映画、演劇、古典芸能など）のビデオを実際に鑑賞した上で、その面白さ、芸術的価値などを受講者全員で討論する方法を採用している。

演習系の科目においては、文章を読むか動画を観るかの違いはあれども、学生個々が独りよがりにならず、議論を通じて自分自身を客観視できるようになることを目指すという点に違いは無い。

これらの教育方法は長年大学教育に関わる中で自然と醸成されたものだが、結果的にアクティブ・ラーニングなどの考え方にも沿うものとなっており、学生たちの自発的な学習意欲をかき立てるのにも大いに役に立っていると考えている。

4、学生からの評価と授業改善への努力

私が担当する科目は十年以上継続して実施しているものが少なくないが、その間の学生の授業評価アンケートの結果を見る限り、同一授業での経年変化、年ごとのばらつきはほとんど見られない。全体的な授業評価においては過去から現在に至るまで問題となるような結果が出たことはほぼないと言ってよい。

人文学科の場合、1年次の基礎科目の受講状況などから、2年次以上の学生の個々の学力レベルや傾向を、われわれ教員はほぼつかんでいる。演習（講読）系の科目は2年次以上が受講の対象となるが、私の場合、受講生の構成を見て授業の運営方針を立てるようにしており、2、3、4年生の人数バランスや、学力レベルの高い学生の割合等を勘案した上で、解説の質や量を変更し、学生の反応をよく観察しながら進めるようにしているため、年度当初はなかなかついて来られなかった学生も、半期終わる頃にはかなり変化を見せるようになるのが通例である。

5、今後の教育目標

一貫して指摘していることだが、文科省が唱える ICT 環境整備等と本学学生の現状との間には明らかに温度差がある。スマートフォンの高機能化によって、情報収集からデータ保存、レポートの作成に至るまで、パソコンよりも便利に行えるようになってきたことを考えれば、パソコンで卒論を書くようにと強制することには意味が無く、スマートフォンを教育にいかに関活用するかを考えた方がよい。

今年度も完全に対面での授業に戻っており、双方向コミュニケーションツール「Teams」を使うことが学生たちにもなじんできたことを建設的に考える必要はあろう。

我々人文学をベースとする教員が大学教育の中で担うべき役割は、従来通り学生たちに、文献を読む能力（読解力）、資料を分析する能力（分析力）、それに基づいて議論する能力（ディベート力）、結果を発表する能力（プレゼンテーション力）を身につけさせるようトレーニングすること以外にはない。技術は時とともに移り変わるものであるので、それに乗り遅れないよう最低限努力する必要があるが、技術に支配されない普遍的な教育目標を持ち続けることこそ大切であることは言うまでもない。

あくまで余談ではあるが、今年度同朋高校との連携授業を担当した折に、私の専門領域である中国アジアに関して、彼らの持つ知識量があまりにも少ないことに驚愕した。同朋大学の学生に対しても、こんなことぐらいは当然知っているであろうという先入観を、改めて問いたださなければいけない時期に来ているのだと思われる。